

7. グリフィンは飛んでいく —動物図像から見る中央アンデス先スペイン期ワリ国家の地方支配—

渡部森哉*

1. はじめに

世界中の多くの文明において動物が様々な表象に用いられてきた。本稿では南米大陸に栄えた古代アンデス文明を事例として、動物表象とその社会文化的位置づけについて、図像を中心に考察をする。

南米大陸のアマゾン地帯をはじめとする多くの地域では、社会集団の分類に動植物が用いられ、そうした人間集団と特別なかわりを持つ動植物はトーテムと呼ばれる。本論のはじめに、アンデスにおける動物表象をトーテムとして解釈できるかどうかを、先スペイン期最後に登場したインカ帝国（後400-1532年）を事例として検討する。次に動物表象が三分法という分類体系と平行するという可能性を、同じくインカ帝国を事例に考察し、さらにそれがどこまで遡るかを検討する。最後にインカ帝国よりも古い時代に繁栄したワリ国家（後600-1000年）を事例として取り上げ、図像に見られる動物表象から当時の社会状況、特に首都と地方の関係について、グリフィンと呼ばれる鳥の属性を備えた図像表現に注目し、実験的に分析する。

2. トーテミズム

南米大陸のインカ帝国やワリ国家を事例として動物表象を取り上げる際に、まず検討する必要があるのは、動物表象がトーテムに対応しているという可能性である。トーテムに関してはこれまで主にアマゾンの小規模社会などの事例が取り上げられてきたが、地理的な近接性という点からも、アンデスの国家社会にも同じ特徴が認められるかどうかを検討する価値があるであろう。

トーテムについてはクロード・レヴィ＝ストロースが1962年に『今日のトーテミズム』（1970[1962]）を出版し、構造分析を加えた。彼によれば、トーテミズムは人間に本質的に備わる分類するという行為の1つである。動物と人間集団の間に直接的な関係があるのではなく、集団間の関係を、動物を比喩的に用いることによって示しているのである。言い換えれば、特定の動物と人間集団に何か実質的な関係があるのではなく、社会間の関係と動物間の表象の間に平行関係が認められるということである。分類の際には、自然界の間で認識される何らかの差異に注目される。分類は差異に注目することから始まり、他の単位（動物）との差を強調することで、特定の集団内の共通性が浮き彫りになる。つまり境界が明確化される。

レヴィ＝ストロースによれば、各文化で選択される動物（あるいは植物などその他のもの）は、「食べるのに適している」からではなく、「考えるのに適している」から選ばれるのであり、トーテミズムは彼らの知識欲を満たす論理的方法である。

さらにレヴィ＝ストロースは動物をそのまま用いるのではなく、体の特定の部分を使用し、他の動物の部分とくっつけることもあることを指摘している。このことをトーテム演算子と呼ぶ（ワイズマン・グローブス 1998）。この場合、体の部分は集団の下位グループに対応すると考えられる。このようにして同一レベルの関係性ではなく、重層的な、あるいは入れ子状の関係をも示すことができるのである。この特徴をレヴィ＝ストロースは拡張性と説明する。

『今日のトーテミズム』以前には、レヴィ＝ブリュエルなど様々な研究者が考察しており、アンデス研究者の中でもジョン・H・ロウがトーテムについて言及している。彼は1946年の論文のなかでインカ帝国、アンデス社会の基本単位であるアイリュについて、「まとめると、インカのアイリュは、理論的には族内婚の男系の親族集団で、トーテミズムは認められない¹」（Rowe 1946: 255）と述べている。

*南山大学人文学部人類文化学科准教授。博士（学術）。専門はアンデスの考古学・文化人類学・エスノヒストリー。現在のテーマはペルー北部高地カハマルカ地方に発展したカハマルカ文化（前50-後1532年）とインカ帝国、ワリ帝国の関係。これまでタンタリカ遺跡、サンタ・デリア遺跡、バーニョス・デル・インカ遺跡、パレドネス遺跡、エル・バラシオ遺跡で発掘調査を実施。

¹ To summarize, the Inca ayllu was a kin group with theoretical endogamy, with descent in the male line, and without totemism

その理由として、アイリュが特定の動物を祖先として崇拝しているわけではないこと、動物の名前がアイリュの名称として選択されていないこと、特定の動物へのタブーが存在しないこと、などを挙げている。アンデスのアイリュの基本は、ワカと呼ばれる聖なる存在で、各アイリュごとに彼らの祖先が出てきたとされる特別なワカがあった。そして各ワカは、岩や泉、山など特定の自然の物体と結びついており、動物や植物が祖先の出てきたワカと認識されることはなかった。ロウの解釈はレヴィ＝ストロースの著作が刊行される前に主流であった考え方、即ち特定の集団と特定の動物の1対1関係に注目した論である。

しかしインカに動物の表象がなかったわけではない。ここではレヴィ＝ストロースの、動物間の関係性が人間の集団間関係を示す、つまり社会分類の手段として動物表象を用いているというトーテミズムの考え方に従って、分類体系に動物が利用されるという可能性を探ってみたい。またアンデス研究では先スペイン期最後のインカ帝国、あるいはその直後の植民地時代の状況から先住民社会の基本的特徴を抽出する傾向が強いが、本論文でも同様にインカの事例を先スペイン期社会に応用してみたい。

インカ帝国では、太陽、月、金星などの天体(ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ 2006[1609]:2巻、122-126)、金、銀、銅などの金属(Lechtman 2007)が3つセットで用いられたが、同様に動物や植物が利用されたかは明確ではない。しかし図像表現において動物の体のパーツを組み合わせるという特徴が先スペイン期アンデスの諸文化でも認められ、複数の動物の属性を備えた存在が描かれる。このことは、レヴィ＝ストロースのいう拡張性を想起させ、分類体系に動物が利用された可能性を示している。しかし、ロウが指摘するように、各アイリュに動物表象が対応するわけではない。動物が分類に使用されるとすれば一体どのような状況においてであろうか。次にこのことを考えてみたい。

3. インカ帝国における動物表象

アンデス社会の基本単位としてアイリュがしばしば挙げられるが、それは特定の祖先から出てきたと考える親族集団であり、人類学の用語ではクラン、あるいはリネージに対応する。祖先崇拝がアイリュの基本的特徴の1つであり、祖先は特定のワカ(聖なる存在)から出てきたと考えられ、それをパカリナと呼ぶ。ワカは特定の自然の特徴、岩や川、泉などに結びつけられており、空間的に固定されている²(渡部 2007)。換言すれば自然の地形を用いてアンデスの民は分類を行っていると理解できる。

先スペイン期アンデスの最後に登場したインカ帝国では、人間や動物などの具象的な図像表現は相対的に少ないが、動物が登場する事例は確かにある。インカ帝国における動物認識を考察するために、はじめに首都クスコの事例を取り上げたい。

インカ帝国における動物表象を考える際にしばしば注目され、引用されるのは、16世紀に書かれたファン・デ・ベタンソスの記録文書のなかの記述である。それによれば、クスコはピューマの身体と呼ばれ、またコリカンチャよりも下の地区は「ピューマの尻尾(pumachupa)」と呼ばれた(Betanzos 1996[1551-1557]:16~17章)。そのため、クスコの設計がピューマの身体を模しているという前提で、クスコの平面図にピューマの姿を重ね合わせる研究者が多かった(cf. Julien 2007; Rowe 1967)。しかし、トム・ザウデマが的確に指摘するように、クスコ全体がピューマの形をしていると考えるのは早計である(Zuidema 1985, 1989)。

ベタンソスの後、ペドロ・サルミエント・デ・ガンボアは1572年の記録文書の第53章中で、パチャクティがクスコを「ライオンの都(ciudad león)」と呼び、当初は体の部分だけであったが、その息子のトパ・インカが頭の部分を、髻として付け加えたと書いている(Sarmiento de Gamboa 1943[1572]:136)。注意したいのは、サルミエントはライオンの頭とは特定していないということである。頭に同定されるのはサクサイワマンの丘であり、その意味は「王のワシ(águila real)」(González Holguín 1989[1602]:75)である³(Zuidema 1985:236, 1989:374)。スペイン人はネコ科動物ピューマのことをライオン、ジ

² ただしクリストバル・デ・アルボルノスは、“Ay, como dixen arriba, el principal género de guacas que antes fuesen sujetos al ynga tenían, que llaman pacariscas, que quieren dezir criadoras de sus naturalezas. Son en diferentes formas y nombres conforme a las provincias: unos tenían piedras, otros fuentes y ríos, otros cuebas, otros animales y aves e otros géneros de árboles y de vervas y desta diferencia tratavan ser criados y descender de las dichas cosas, como los yngas dezian[ん] ser salidos de Pacaritambo” (Albornoz 1989[1585]:169; cited in Morris and von Hagen 2011:68)と述べ、動植物がパカリナになることを指摘している。もしそうだとすれば、トーテムとして解釈できるが、具体的事例が提示されておらず、他の記録文書から裏付けることもできない。

³ ただしキャサリン・ジュリアンはライオンの頭と解釈している(Julien 2007:231)。

ジャガーのことをトラと呼んだ。そうするとクスコはワシの頭⁴とライオン（ピューマ）の体が合体した形になる。

さらにインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガは『インカ皇統記』第7の書第8章でクスコのチャキルカチャ地区について「水路はコルケマチャック＝ワイ、すなわち『銀の蛇』と呼ばれ、その水がまるで銀のように白く、また水路が地中を蛇のように曲がりくねって進んでいたことにちなむ名であった」と述べている（ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ 2006[1609]）。またクスコ内部には、アマル・カンチャという建物がある。アマルとはケチュア語で蛇を意味する単語であるため、クスコの表象に関連する動物としてヘビの存在を指摘することができる。

ここまで取り上げた3種類の動物、ピューマ（プマ、ポマ）、ワシ（グアマン、ワマン）、ヘビ（アマル、アマロ）は人名にも付される。例えば17世紀初頭に多数の絵を含む記録文書を残した先住民記録者の名前がフェリペ・グアマン・ポマ・デ・アヤラであり、ワシを意味するグアマンとピューマを意味するポマが一緒になっている。また例えばグアマン・ポマの記録文書に登場する人名を拾ってみるだけでも、カパック・ポマ（Cápac Poma; Guaman Poma 1987[1615]: 173）、カパック・アポ・グアマン・チャウア（Capac Apo Guaman Chaua; ibid.: 165）、トパ・アマロ・インガ（Topa Amaro Inga; ibid.: 147）などがある。さらにインカ王であったとされる人物のなかにも、アマル・ユパンキという、アマル（ヘビ）という名をつけた人物がいる。ビルカバンバに立てこもり、最終的に1572年に処刑されたインカ王もトゥパク・アマルである。こうした状況証拠から、クスコ内の場所や人物につく動物として、ピューマ、ワシ、ヘビの3種類があり、ほぼそれに限定されることに注目したい。つまり、リヤマ（llama）やシカ（taruca）、テンジクネズミ（クイ *cuy*）の名称の付いた地名や人名はないのだ。

さて首都クスコやインカ王に直接関係する動物として3種類を抽出したが、これを支持する状況証拠を挙げておきたい。グアマン・ポマの記録文書に、「第1の紋章」（図1）、「第2の紋章」（図2）がある（渡部 2010）。紋章という発想自体、および内部が4分割されるという形式は、明らかにヨーロッパに由来する特徴である。しかし、それぞれの枠内に描かれているのはアンデスの要素である。第1の紋章には、太陽、月、星（金星）、そしてパカリクタンボ洞窟が、第2の紋章には、鳥、オトロongo（ネコ科動物ジャガー）、2匹のヘビ、そしてマスカパイチャ（インカ王が額につける房飾り）が描かれている。鳥はクリキンキ・ティカ・プルマ（Curiquinqui tica pluma⁵）と書かれており、ワシの一種である。ピューマではなくジャガーが描かれているが、4つの枠の中の3種類の動物が大きくネコ科動物・鳥・ヘビという組み合わせであることは、クスコに認められる3種類の動物と同じである。また2つの紋章では4つの枠のうち1つを別のカテゴリーのもの（パカリクタンボ洞窟、マスカパイチャ）が占めており、動物も、天体も4つではなく3つの単位に用いられた表象であるようだ。

4分割された紋章の枠の中に3種類の動物が描かれていることは、インカ帝国において四分法と三分法が同時に機能していることと平行関係にある（渡部 2010）。インカ帝国はタワンティンスユという名前でも呼ばれ、それは「4つの部分が一緒になった」を意味する。動物は四分法ではなく、三分法に対応する表象として選択されている。

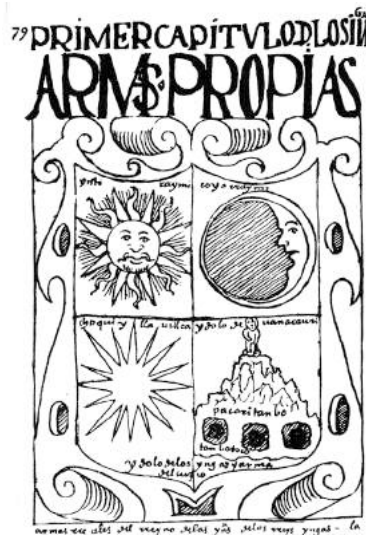


図1(左)：第1の紋章（Guaman Poma de Ayala 1987[ca.1615]）
 図2(右)：第2の紋章（Guaman Poma de Ayala 1987[ca.1615]）

⁴ ただし一般的に“waman”は「タカ（halcón）」の意味である。

⁵ ヤン・シェミンスキは次のように解説している。“kuri qinqi tika=pluma del que excede al rayo, SZ92:80-84; Kuri qinqi, hoy en Cuzco quri qunqa=especie de águila de plumas doradas y blancas, CU 1976:114; águila fraylesca LB 2:60; ave de rapiña blanca y parda GH 69” (Szemiński 1993: 64)

また人間と動物を二項対立的に捉える西洋の思考とは異なり、アンデスでは動物一般を示す単語がなく、四つ足動物、鳥、魚など、より小さなカテゴリーごとに名前がつけられている⁶。アンデスに存在する動物は、全て平行関係にあるのではなく、いくつかのカテゴリーに分かれ、インカ帝国ではネコ科動物、鳥、ヘビの3つの動物は他の動物から識別され、セットで使用されていたようだ。ではこれらの3動物以外はどうであろうか。

インカの図像表現で特筆すべきは、金属製品である。上述の3種類の動物の全身像が表現されたものはないが、ラクダ科動物の家畜であるリヤマやアルパカの場合は、人間と同様に立体的に全身像が作られた。重要なのはリヤマやアルパカは全身像のみで現れるということである。パーツに分解され、例えばギリシアのケンタウロスのように、リヤマの属性の一部が人間など他の表現と結びつくことはないのである。ラクダ科動物の家畜は他の動物とは違うカテゴリーに分類されていたようだ。またコノパ(代々受け継がれる信仰の対象物)として表現される動物としては、アルパカやリヤマの全身像が主流であり、少数であるがピューマもある。シカやイヌはインカの図像に現れない⁷。

一般的にインカでは具象的図像表現が少なく、幾何学紋様などが主流であった。社会の基本単位アイリユは動物ではなく、聖なる存在ワカ、すなわち自然に組み込まれた地形に結びついていた。そして各ワカは、例えば岩、あるいは泉ごとに同じカテゴリーでまとまることはなく併存関係にあり、より大きな枠組みを組み立てることはなかった。一方、動物も同様に分類に利用されたのであるが、三分法と対応しており、各ワカに分かれた集団を上レベルで統合する表象に使用されたようである。そして三分法の存在は、セケ体系と呼ばれるクスコの分類体系に典型的に示されている。それは具体的自然物を用いない抽象度の高い分類概念、コリヤナ、パヤン、カヤウによる三分法である。

クスコの中心のコリカンチャ(太陽の神殿)から、セケという想像上の線が伸びており、それぞれの線はクスコ内のワカを結んだ。セケは41本あった。クスコには計328のワカが記録されており、各セケには3~15の数のワカが対応した。セケはクスコの空間分類や、人間集団の分類に用いられ、これをセケ体系と呼んでいる。各共同体の単位であるワカをセケがまとめることで、328の単位が41になる。そして各セケにはコリヤナ、パヤン、カヤウいずれかの範疇が割り当てられていた⁸。つまり41のセケよりも上位の分類体系として、三分法がある。3種類の動物がコリヤナ、パヤン、カヤウと平行関係にあれば、やはり動物表象は各共同体ではなく、より上位の分類体系に関係することが理解できる。

では次に、こうした三分法がどこまで遡るのかを検討したい。

4. 三分法の起源

まずインカの起源神話にも登場するティワナク遺跡を見てみたい。それは後600-1100年に繁栄したティワナク社会の首都であり、現在のボリビアのティティカカ湖の南東に位置する。精緻な石造建築、石彫や織物、土器、骨角器に施された複雑な図像で有名である。

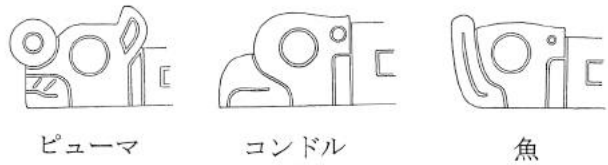


図3: ティワナク遺跡の石彫に現れる3種類の動物の頭部 (Stübel and Uhle 1892)

ティワナク遺跡では多くの石彫が出土しているが、門と丸彫りの全身人物像が主流である。太陽の門、ベネットの石彫、ポンセの石彫が特に有名である。それらの表面には刻線で細かい紋様が刻まれ、正面向きあるいは横向きの人物の全身像や顔が繰り返し表現されている。注目すべきはそれらの人物が、3種類の動物の頭部で装飾されているということである(図3)。頭飾りや手にもった槍と投槍器の先端部、胸、顔の周り、羽根飾りの先端部などに繰り返し表現され、多くの場合横向きである。動物は研究者の

⁶ ケチュア語では“Animales brutos. Manasonccoyok sonconnac cauçac cuna, o llamacuna, o tahuachaquiyoc” (González Holguín 1989[1608]: 408), “Animales del ayre. Pichiucuna. Dela mar. Challhuacuna” (ibid.: 408), “Cauçac cuna. Los viuos o viuientes.” (ibid.: 51), “Llamacuna, o manayuyakcuna. Todos los animales.” (ibid.: 208), “Tahua chaquiyok. Todo animal aunque no sea de quatro pies como aues y peces.” (ibid.: 336), “Challhuacuna, o ñauraymitta challhua. Todas maneras de peces.” (ibid.: 93), “Mana soncoyok. Todo lo contrario.” (ibid.: 331)、アイマラ語では“Animal. No hay nombre generico que los comprenda todos: A los de quatro pies llaman: Pussicayuni.” (Bertonio 2006[1612]: 86)

⁷ 先インカ期のモチェ社会の図像表現ではシカやイヌもしばしば図像に描かれる。シカは狩りの対象であり、食用にされるが、全身像で描かれる。その角などの要素が図像に部分的に取り入れられることはない。

⁸ 4つのスユにも、コリヤナ、パヤン、カヤウの範疇が当てはめられた。チンチャイスユ=コリヤナ、コリヤスユ=パヤン、アンティスユ=カヤウ、クンティスユ=カヤウである (渡部 2010)。

間で、ピューマ、コンドル、魚と同定されている。重要なのはそれらが頭部のみで、全身像が殆ど描かれないということである。鳥の羽、あるいは魚のヒレ、ピューマの鼻⁹（二重円）が利用される場合もあり、基本的にパーツのみが利用され、それが人物像に伴う属性として複数組み合わせられている。一方、少数であるが牙をはやしたリヤマのような四つ足動物の全身像も確認されている。

クリストフ・マコフスキはティワナクの 3 種類の動物とインカのコリヤナ、パヤン、カヤウの三分法との間に平行関係を認めているが、筆者も同意見である（Makowski 2002: 360; 渡部 2010）。インカのヘビとティワナクの魚が置換しているが、3 つの動物の組み合わせという点は同じである。どのような動物が選択されるかは、それぞれの社会で異なるであろうし、まさにそれはレヴィ＝ストロースのいうブリコラージュの特徴を示している（レヴィ＝ストロース 1976[1962]）。インカのように動物が、三分法という上位の分類の単位であれば、動物で装飾された石彫の人物は、複数の集団をまとめるメカニズムが存在したことを示している可能性があるだろう。マコフスキはベネットの石彫やポンセの石彫の紋様を施された人物像は決して神の表象ではなく、特定の集団の創始者となった祖先、さらには支配下にいくつかの集団をかかえた支配者集団、王族であると推論している（Makowski 2009: 145, 155）。神ではなく特定の祖先と解釈することは、アンデスの共同体の基本がワカを中心とする祖先崇拜であることと整合性があるが、各石彫が歴史上実在した個人を示しているかどうかは不明である。そして 3 種の動物の属性（頭部）が繰り返し描かれているということは、コリヤナ、パヤン、カヤウによる三分法が 41 のセケの中で繰り返し当てはめられたクスコのセケ体系と相同の特徴を示しており、ティワナクの社会構造に従って図像が彫り込まれたことは十分考えられる。

3 種類の動物の組み合わせは形成期まで遡る可能性がある。ペルー中央海岸に形成期中期（前 1200-800 年）に U 字形基壇配置の神殿に特徴付けられるマンチャイ文化が広まり、その図像の特徴の 1 つがヘビ、ジャガー、鳥の組み合わせである（Burger and Salazar 2008: 91）。マンチャイ文化やペルー北海岸のクピスニケ文化の要素を取り入れたチャビン・デ・ワンタル神殿でも 3 種類の動物の組み合わせは重要であり、例えばテーヨのオベリスクに 3 つの動物の全身像が描かれている（渡部 2010）。クピスニケ文化の流れを汲むクントウル・ワシ遺跡でも、この 3 種類の動物の属性が図像に選択された（Onuki [ed.] 1995）。ジャガーの牙、猛禽類のかぎ爪、ヘビの胴部などが、石像彫刻や黄金製品の図像に採用された。各動物の全身像もあり、例えばクントウル・ワシ神殿の中央基壇の下で発見された 4 基の墓の 1 つ、第 1 号墓では、赤色鳥象形鏡形土器が出ている¹⁰。

アンデス形成期に関して「ジャガー神」という言葉を用いる研究者がいるが、それは決して神を表しているわけではなく、ジャガーの属性を備えた人物を示している。そしてジャガーは、特定の文化では三分法に用いられる動物の 1 つである。

以上のように 3 種類の動物の組み合わせがインカ期、ティワナク期、形成期に存在することを指摘した。しかし、ペルー北海岸のモチエ文化やチムー文化、南海岸のナスカ文化などにはそのような組み合わせが存在したかどうかは明らかではない。むしろ各文化で図像表現に多様性が認められ、例えばチムー文化では鏡形土器にサルの表象が単独で強調される。モチエでもジャガーの牙は使用されるのであるが、三分法の特徴は明確ではない。動物を用いた分類はあったかもしれないが、三分法が主流ではなかったかもしれないし、動物の組み合わせも異なっていたかもしれない。しかも、パーツに分けて組み合わせるだけではなく、例えばイヌなど、単独で全身像で描かれる場合が多く認められる。ナスカ文化においても、地上絵や土器にも多くの動物は登場するが、それぞれ並列的に利用されているようであり、インカやティワナクのような 3 種類の動物の組み合わせは確認できない。

以上のように、アンデスを一括りにすることはできず、三分法が存在しない事例については別の分析の枠組みが必要になるだろう。また、この三分法が認められる諸文化の最後にインカ帝国が位置づけられるということは、この構造自体の適用に大規模組織の成立を可能とする鍵が含まれているのかもしれない。動物表象の重層性から、社会の複雑性、階層制を議論することが今後の課題である。

次に、インカに繋がる図像の系譜を辿ることができる、ティワナクと同時代に繁栄した国ワリを取り上げ、3 種類の動物の関係性に注目したい。

⁹ 二重円がピューマの鼻と同じ形をしている。形成期のネコ科動物のジャガーは牙が連続的に描かれるのであるが、ピューマを示す特徴として鼻が選択されたのかもしれない。

¹⁰ 同様に第 4 号墓では鳥形の小型金属製品が出土している。筆者は第 1 号墓の人物と第 4 号墓の人物は神官ではないと想定しているが（渡部 2010）、鳥は神官に結びつけられるジャガーと対峙させられ用いられたのかもしれない。

5. ワリ国家におけるグリフィンの図像

ワリはペルー中央高地南部アヤクチョ地方にある遺跡ワリを首都として、後 600-1000 年頃に繁栄した国である。後のインカ帝国と同様に、各地に行政センターを設置し、地方支配の拠点とした。この時代には、ワリの支配下で広範囲に人間、物資が移動した。切石ではなく割石を用いて厚い壁を建て、基壇型建造物よりも大小の空間を組み合わせた建物が中心であるという点などはティワナクとは異なっている。しかしながら、図像の特徴はティワナク文化と著しい類似性を示しており、土器や布には両手に槍と投槍器を持った人物や、3 種類の動物の頭部などが描かれた。そのため片方からもう片方へ図像が伝わった、あるいは第 3 の起源地から両文化に同じ図像が伝わったという可能性が指摘されている (Isbell 1983)。また最近の議論は、起源地はどこかという問題から、それらの図像が各地にどのように受容されたかを重視する方向にシフトしている (Isbell and Knobloch 2009)。

ワリ文化における図像は、土器に描かれており、石彫が中心であったティワナクとの間には媒体の違いがある。石彫は基本的に動かすことを前提としておらず、それを見るためにはティワナク遺跡まで行く必要がある。一方土器や布は、各地に図像を伝えるのに有効である。このことは、開けた開放的な構造のティワナク遺跡と、高い壁でアクセスが制限されたワリ遺跡の設計の違いとも平行している。

ワリ文化では、高さ 60~80cm ほどある大型土器を作るのが特徴であり、土器の表面に多彩色で図像が表現されている。また小規模な土器には人物の全身像ではなく、顔のみが描かれるだけである。これはティワナクの大型石彫と異なり、スペースが限定されているためかもしれない。いずれにせよ明らかなのは、ワリの図像に描かれる人物を装飾する属性として、3 種類の動物の頭部が選択されていることである (cf. Menzel 1977)。ティワナクの図像と比較してワリの図像では、ピューマとコンドルが多く用いられ、魚は少ないのが特徴である。またワリ様式土器にはリヤマの全身を立体的に象ったものが多くあり、リヤマが 3 種類の動物とは別カテゴリーであるという点でインカと共通する。

ワリ様式土器についてはドロシー・メンゼルが 1960 年代に提案したタイプ分類が使用されている。それによれば、中期ホライズン 1 期 (MH1) と 2 期 (MH2) に分けられ、首都から各地に拡大したのは 2 期であるという。2 期には、アヤクチョを中心に分布するビニャケ様式、ペルー南海岸のナスカ地域を中心に分布するアタルコ様式、そしてペルー中央海岸を中心に確認されているパチャカマク様式の 3 つが主要な様式として設定されている。ここで注目したいのは、パチャカマク様式の特徴として挙げられた鳥の属性を伴う「グリフィン」と呼ばれる図像表現である。

1964 年の論文でメンゼルがグリフィンと命名したのは、鳥のくちばしを伴う顔の、羽をはやし、腹を下にして体を伸ばして飛んでいるような姿勢の横向きの像である (Menzel 1964: 59; Shimada 1991)。当然ながらユーラシアのグリフィンとの間には系統関係はない (cf. 林 2006)。MH2 期¹¹のパチャカマク様式の特徴であり、コップなどに多く表現され、MH2A と MH2B で分けられている¹² (図 4; 図 5)。鳥の顔を正面向きに表した壺もある。メンゼルはネコ科動物の体に、鳥の頭と羽が付いていると説明し

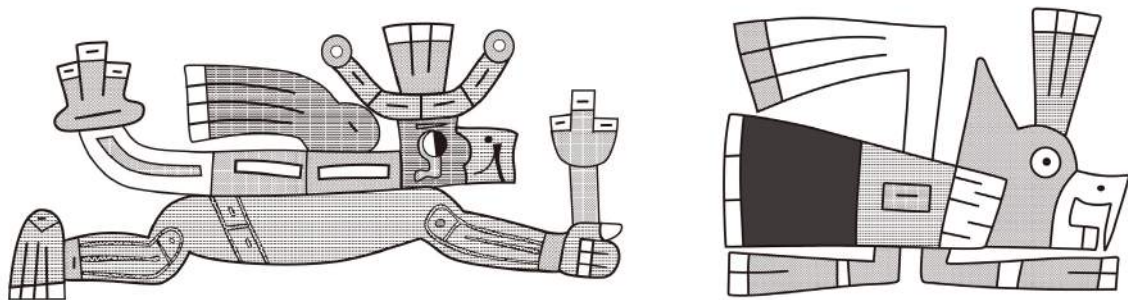


図 4(左):パチャカマクの MH2A 期のグリフィン (Shimada 1991 をトレース)

図 5(右):パチャカマクの MH2B 期のグリフィン (Shimada 1991 をトレース)

¹¹ ノブブロックは MH1B にグリフィンを時期比定している (ノブブロック 1991)。

¹² チカマ川流域のサウサル遺跡 (Donnan 1968; Menzel 1968: 85-88)、ワリ遺跡モラドゥチャユク地区 (Isbell 1988: 188)、チムー・カパック遺跡 (Menzel 1977: Fig.46B) でも出土している。特にサウサル遺跡出土の頭飾りにグリフィンが描かれた人物は、手を後ろで縛られた人物を示しており、ワリの地方支配を考える上で興味深い。

ており、ペーター・カウリケもその解釈を踏襲している (Kauicke 2001)。見方によっては人間の体に見えるが、メンゼルの分類では、足が 2 本描かれているのを人間として区別している。いずれにせよ動物のパーツを組み合わせるといふアンデスの図像伝統の特徴を示している。

飛んでいるような姿勢と、くちばしと一緒にあったのがグリフィンの図像である。グリフィンの祖型となる図像は、コンチョパタ遺跡で 1942 年に出土した大型土器の図像の一部分を占める像、天使 D (Angel D) である (Menzel 1964: 20, 1977: Fig.91)。天使 D はくちばしを伴う横向きの人物で、飛んでいるような姿勢で杖状の長いものを手にもっている。それとは異なり、グリフィンは単独で現れ、手に持っているものは杖状の長いものではなく、笏杖の短いものである。またティワナク遺跡でも、カンタタイタの石彫などに横向きの飛んでいる姿勢の人物表現が見られるが、くちばしは伴っていない。

ティワナクの太陽の門の図像には、跪いた姿勢のくちばしを伴う横向きの人物像があり、それと類似した、鼻がくちばし状に尖った人物がワリ様式土器に認められる (Cook 1987: Figure 21-23)。アニータ・クックによれば、こうした横向きの人物の祖型は、片手に首級、片手に斧をもった人物にあるという¹³ (Cook 1983, 1987: 62)。ただし横向きの人物が現れて、首級と斧をもった人物表現が消滅したわけではなく共存した¹⁴。

正面向きの人物と横向きの人物はそれぞれ別に存在していたが、ワリとティワナクで同一の図像に統合され、階層制を示すようになった (Cook 1987: 62)。この時、グリフィンの祖型となる横向きの人物は、正面向きの人物に対し下位に位置づけられ、中心的な位置を占める存在ではなかった。

横向きの人物にその系譜を辿ることのできるグリフィンは、首都ワリ遺跡ではなく、むしろ地方、特にペルー中央海岸以北で多く出土している。ビニャケ様式やアタルコ様式では、背中を反り返らせた姿勢の動物が現れるのであるが、ネコ科の顔、あるいはくちばしも牙もない顔である (Menzel 1968: Figure 43-44)。グリフィンとアタルコ様式の天使 (Angel) にはメンゼルが「分割された杖状帯¹⁵ (segmented staff band)」が後頭部に装着しており (Menzel 1964: fig. 10)、この特徴は首都ワリやその近辺には認められず、ティワナクの横向きの人物に見られる特徴である。このことからメンゼルは、MH2 期になってもワリとティワナクの間で図像の要素の交換があり、さらにティワナクとワリの地方との間の直接的繋がりがあったことを示唆している (Menzel 1964: 60)。

グリフィンは地方で多く認められるが、その最北の事例が近年、ペルー北部高地カハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡で発見された (図 6)。同遺跡は標高約 2750m の場所に位置し、山地におけるワリ国家の行政センターとしては最北である。建築物の殆どが地面の下に埋もれているため、その全体像は不明であるが、断片的な情報を総合すると、50 ヘクタール以上ある大遺跡である。筆者が 2008 年、2010 年に発掘調査を

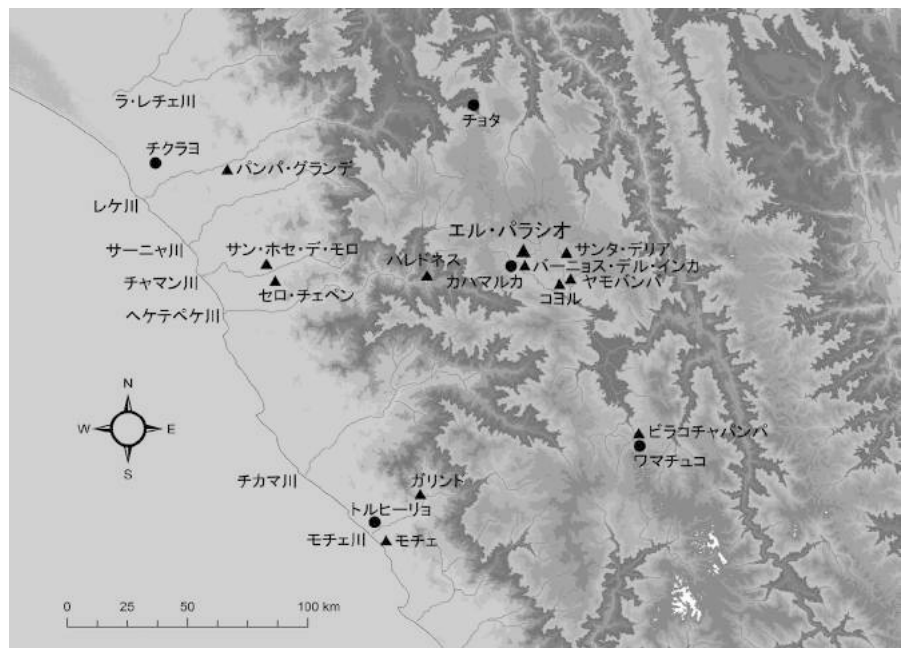


図 6 : ペルー北部のエル・パラシオ遺跡の位置

¹³ さらにチャビン・デ・ワンタル遺跡の黒と白の門の石彫の、槍と投槍器をもった人物にまでその祖型を辿ることができるであろう (cf. Roe 2008)。

¹⁴ 例えば、ワリの大型土器に斧と首級をもった横向きの人物が描かれている (Menzel 1964: Figure 13)。また同様の人物は、ティワナクの太陽の門の端にも描かれており (渡部 2010: 図 6-12)、筆者はボズナンスキーの解釈を踏襲し、トランペットと記述したが (渡部 2010: 290)、それは斧である (Isbell 1987: 114)。

¹⁵ 筆者は「首から延びる飾り」と記述した (渡部 2010)。

実施し（渡部 2009; Watanabe 2011）、2010 年にはその中の B 区を集中的に発掘した（図 7）。エル・パラシオではいくつかの動物表象が見つかっている。例えば部屋状構造 BR1 の床下の奉納 B2 から山形紋様を施されたカオリン製のペッカリー象形土器である（渡部 2009）。また同じ BR1 の床上の奉納 B1 からは 3 種類の動物の頭部を刻線で施したスプーンの破片も出土している（Watanabe 2011: Fig. 22）。

エル・パラシオ遺跡出土のワリ様式の多彩色土器の中には、ネコ科動物の表象が認められず、鳥にほぼ限定される。ワリ様式土器の図像にはネコ科動物の属性とされる牙をはやした顔も確認されていない。

ワリの支配を考える上で重要なのは、グリフィンの図像である（図 8）。2010 年の発掘で部屋状構造の 1 つ BR4 の B 区 13 号墓で多くの人骨や土器が床上に確認されたが、その中に混じって破片の状態で見つかった土器に描かれていた。おそらくエル・パラシオが機能した最後に近い時期に行われた奉納行為の 1 つであり、土器は意図的に割られたのだろう。カハマルカ地方の編年ではカハマルカ中期 C に対応し、後 9、10 世紀頃の時代である。グリフィンは断面が竖琴の形をした、リラ形のコップに描かれている。グリフィンの顔が前後に 2 つ表現されているようであり、体は描かれていない。2 つの顔の間に山形紋様が縦方向に施されている。胎土は細かく、濃い橙色であり、カハマルカ文化のものとは異なる。

他にもワリ様式土器には、鳥に関係する図像が多く確認されている。例えば、4 つ突起のある帽子をかぶった人物を表現した橋形把手付き双注口壺が 2008 年に出土している（図 9）。この形の帽子は、ワリやティワナクの支配者層を示すと解釈されているが、その額の部分に、右向きの鳥の頭部が連続的に描かれている。さらに 2010 年に BR3 で出土した B 区第 10 号墓の副葬品として、イヌ象形黒色橋形把手付き双注口壺と共に見つかったワリ様式の多彩色コップには、羽根飾りの先端部が模式的に描かれている（図 10）。通常、正面向きの人物の顔の周りに描かれる紋様であるが（Menzel 1968: figs. 25, 51）、単独で描かれている。

一方、カハマルカ様式の土器には、ネコ科動物が現れる。カオリン土器に描かれる図像表現は幾何学紋様が主流であるが、碗の内部にネコ科動物などが描かれる（図 11）。耳を大きく表現するのが特徴であ



図 7: エル・パラシオ遺跡 B 区 東側より



図 8(左): グリフィンの図像 エル・パラシオ遺跡 B 区第 13 号墓出土
図 9(右): 橋形把手付き双注口壺 エル・パラシオ遺跡 B 区奉納 B1 出土



図 10(左): ワリ様式土器 エル・パラシオ遺跡 B 区第 10 号墓
図 11(右): カハマルカ様式土器 エル・パラシオ遺跡 B 区第 19 号墓出土

る。また、ネコ科動物の全身像を象った灰色土器が B 区第 1 号墓の南の構造物 B1 内で 2 点出土しているが、ワリ様式の多彩色土器ではなく、おそらくペルー北海岸の土器製作伝統にその系譜を辿ることができる (図 12)。

ワリ様式の多彩色土器に、ネコ科動物でなく鳥が現れることは、中央と地方、より具体的には、ワリの支配者と在地のカハマルカの人々の関係を探る上で鍵となろう。また同時に、首都ワリにおいては、ピューマ、コンドル、魚の 3 動物の組み合わせが認められるが、エル・パラシオでは魚の表象は皆無に近い。むしろネコと鳥の二項対立的な関係が浮かびあがる。

ネコ科動物と鳥の対立関係については、すでにメンゼルが 1968 年の論文で指摘している (Menzel 1968: 87)。彼女によれば、動物の体をしたネコ科動物の頭をつけた図像と、動物の体をして鳥の頭部が付いたグリフィンはライバル関係にある。また、グリフィンは、人間の体をして立った姿勢のネコ科の顔をした図像 (Angel A) と対立せず共存し、ともに首に杖状の帯 (staff bar) を伴う。また「背中が反り返った¹⁶動物 (humped-animal)」 (Donnan 1968: figure 3) がグリフィンと一緒にコンテクストで出ており、本来「動物の体+ネコ科動物の頭」の図像が占めていた場所に位置づけられているという可能性を提示している (Menzel 1968: 88)。エル・パラシオでは、メンゼルがネコ科動物の皮 (feline-pelt; Menzel 1968: 60) の特徴とした紋様を伴う動物の破片が 1 点出土している (図 13)。背中が反り返った姿勢である。頭部は未確認であるが、牙をばやしていない頭部であれば「背中が反り返った動物」となり、メンゼルの説に合致する (Menzel 1968: figure 44)。

鳥頭とネコ頭の図像の分布が排他的で、重なり合わなければ、互いにライバル関係であったことの間接的証拠となろう。エル・パラシオのデータはまだ不十分であるため、今後データを増やして検証する必要がある。そもそも中央対地方という構図を描くのであれば (ibid.:94)、鳥の顔かネコの顔かというディテールはより大きな枠組みに包摂されるであろう。

またエル・パラシオでは、建築物が埋められた後、即ちワリの支配が終わった後のカハマルカ後期の層から、鳥の頭部を象った黒色土器片が出ている (図 14)。くちばしが尖っておらず、唇の部分が魚のように広がっている場合もあり、複数の動物の属性が組み合わさっている表現もある。全体の器形は不明であるが、壺の一部であり把手の部分が鳥形に表象されている。また一方で、赤色土器の把手にはネコ科動物の頭部も表現され (図 15)、鳥とネコが対立的に用いられているようだ。



図 12：ネコ科動物象形灰色土器
エル・パラシオ B 区第 2 号墓出土

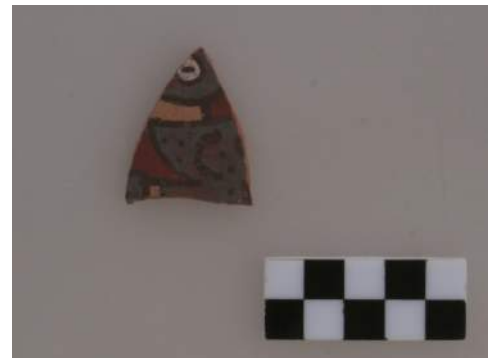


図 13：ワリ様式土器破片
エル・パラシオ遺跡 B 区出土



図 14(左)：鳥象形土器片 エル・パラシオ遺跡 B 区出土



図 15(右)：ネコ科動物象形土器片 エル・パラシオ遺跡 B 区出土

¹⁶ 通常 Humped-animal の姿勢は逆に背中が丸まっており、反り返っているのはネコ科動物の姿勢である。

同時期の類似した鳥の図像例を探してみると、ペルー北海岸のラ・レチュエ川中心に繁栄したシカン前期（後 850-950 年）の長頸壺がある。頸部に鳥の頭部が表現されており、島田はパチャカマクのグリフィンとの類似性を指摘している（Shimada 1990, 1991: IL-L）。またシカン中期（後 950-1100 年）の橋形把手付き双注口壺の把手の部分に、4 つ突起のある帽子をかぶった人物の顔が鳥のように表象された例が天野博物館に所蔵されている（増田 1991: 図 1）。シカン文化では、ネコ科動物も現れるが、正面向きではなく横向きで、むしろ脇に描かれており、鳥に対して下位に置かれているようである。

カハマルカ後期では、部位は異なるが、土器の一部に鳥の頭部が立体的に表現されていることは共通する。パチャカマクからシカンとカハマルカ地方の両方に伝わったのか、あるいはシカンからカハマルカへ、もしくは逆にカハマルカからシカンへ伝わったのかは不明である。いずれにせよ指摘できるのは、グリフィンの表象が、首都ワリではなく地方で多いこと、ワリ崩壊後も鳥の表象がペルー北部地方で中心的な位置を占めるということである。ワリで主流であるネコ科動物が中心的には現れることはないのである。

一体首都ワリから離れた遠隔地で鳥の表象が多いということは何を示しているのでしょうか。そもそも首都で多くない新たな図像表現が存在すること自体、地方の独立性、独自性を示すと読み取ることもできる。グリフィンの分布はペルー中央海岸が中心とされるが、ワリ遺跡よりも北の離れた場所が多いという、大まかな見取り図は描けそうである。中央海岸にせよ北高地にせよ、ワリの地方統治において鳥の図像が重要になった。そこから一方進んで、動物が社会の分類体系と平行関係にあるのであれば、鳥に対応する集団が重要であったのではないかという仮説を提示することができる。これまでワリ文化やティワナク文化では中心的な動物であるネコ科動物に注目が集まっていたが、2 番手の動物である鳥に注目することで、地方支配の実態を解明することに繋がるだろう。また同時に、本来、ネコ科動物と鳥は魚と共に 3 つセットであったが、地方の図像表現に魚が殆ど現れないことも、合わせて考察すべき問題である。

6. おわりに

アンデスにおける動物表象を、レヴィ＝ストロースのトーテミズム理論に則り、分類体系に用いられるツールとして捉え、ここまで考察してきた。アンデスには絶対的な神という概念はなく、人々はワカ崇拝という場に即した信仰、そしてそれに連動した祖先崇拝を行っていた。各集団の基本は自然の中にある地形であり、数多くの集団を機能的にまとめ上げる操作として三分法が用いられた。そして、それを動物などで表象した。しかしインカ帝国に三分法が認められるということは、単純に社会が 3 つに分かれていることを示しているわけではない。インカ帝国では四分法や三分法は重層的に使用されており、注目するレベルによって、対応する範疇は異なる。

ワリ、ティワナクでは、3 種類の動物が図像表現に認められる。本稿では、図像表現における動物間の関係、すなわち構造を、政治状況を解明する手がかりとし、ワリ国家では 3 種類の動物のうち、鳥が首都ではなく地方で多く見つかることなどを指摘した。鳥に対応する集団が征服に参加した集団であった、あるいは地方統治を任された人々であり、地方支配においては重要であったと仮定しているが、今後データを増やして検証する必要がある。

インカの時代にはミトマと呼ばれる植民者が帝国各地に移住させられた。また垂直統御などの形で、飛び地に人が派遣された。そしてその統治を司った首長がいた。スペインの植民地支配下になり、そうした人々が元々の土地に帰ったかというところではなく、新たな体制の下で交渉し、巧みに生き延びたのである（Van Buren 1996）。鳥の図像はワリの崩壊後もカハマルカや北海岸で存続し続けた。インカ帝国の征服後に類似した状況が、ワリ国家崩壊時に生じたかどうか、これからの課題としておきたい。

参考文献

Albornoz, C. de

1989[1584?] Instrucción para descubrir todas las guacas del Pirú y sus camayos y haciendas. In *Fábulas y Mitos de los Inca*, edited by H. Urbano and P. Duviols, pp. 161-198. Historia 16, Madrid.

- Bertonio, L.
2006[1612] *Vocabulario de la Lengva Aymara*. Ediciones El Lector, Arequipa.
- Betanzos, J. de
1996[1551-1557] *Narrative of the Incas*. Translated and edited by Roland Hamilton and Dana Buchanan from the Palma de Mallorca manuscript . University of Texas Press, Austin.
- Burger, R. L. and L. C. Salazar
2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In *Chavín: Art, Architecture and Culture*, edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 85-105. Monograph 61. Cotsen Institute of Archaeology, University of California, Los Angeles.
- Cook, A. G.
1983 Aspects of State Ideology in Huari and Tiwanaku Iconography: The Central Deity and Sacrificer. In *Investigations of the Andean Past*, edited by D. H. Sandweiss, pp. 161-185. Latin American Studies Program. Cornell University, Ithaca.
1987 The Middle Horizon Ceramic Offerings from Conchopata. *Ñawpa Pacha* 22-23(1984-1985):49-90.
- Donnan, C. B.
1968 An Association of Middle Horizon Epoch 2A Spesimens from the Chicama Valley, Peru. *Ñawpa Pacha* 6:15-18.
- ガルシラーソ・デ・ラ・バーガ、インカ
2006[1609] 『インカ皇統記』(牛島信明訳)、4巻、岩波書店。
- González Holguín, D.
1989[1608] *Vocabulario de la Lengua General de Todo el Perú Llamada Lengua Qquichua o del Inca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.
- Guaman Poma de Ayala, F.
1987[ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Edición, introducción y notas de John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge L. Urioste. Crónica de América. Núm 29a-b-c. 3 vols. Historia 16, Madrid.
- 林俊雄
2006 『グリフィンの飛翔—聖獣からみた文化交流—』、雄山閣。
- Isbell, W. H.
1983 Shared Ideology and Parallel Political Development: Huari and Tiwanaku. In *Investigations of the Andean Past*, edited by D. H. Sandweiss, pp. 186-208. Latin American Studies Program. Cornell University, Ithaca.
1987 Conchopata, Ideological Innovator in Middle Horizon 1A. *Ñawpa Pacha* 22-23(1984-1985):91-126.
1988 City and State in Middle Horizon Huari. In *Peruvian Prehistory*, edited by R. W. Keatinge, pp. 164-189. Cambridge University Press, Cambridge.
- Isbell, W. H. and P. J. Knobloch
2009 SAIS-The Origen, Development, and Dating of Tiahuanaco-Huari Iconography. In

Tiwanaku: Papers from the 2005 Mayer Center Symposium at the Denver Art Museum, edited by M. Young-Sánchez, pp. 165-210. The Mayer Center for Pre-Columbian & Spanish Colonial Art at the Denver Art Museum, Denver.

Julien, C.

2007 El Cuzco que vieron los españoles. In *Cuzco: Del Mito a la Historia*, edited by J. A. Flores Ochoa, E. Kuon Arce, R. Samanez Argumedo, L. F. Barreda Murillo and C. Julien, pp. 218-323. Colección Arte y Tesoros del Perú. Banco de Crédito, Lima.

Kaulicke, P.

2001 La sombra de Pachacamac: Huari en la Costa Central. *Boletín de Arqueología PUCP* 4(2000):313-358.

ノブブロック、パトリシア・J

1991 「帝国の工芸家たち—ワリ帝国時代の美術—」(松本亮三訳)、『古代アンデス美術』(増田義郎・島田泉編)、pp. 107-123、岩波書店。

Lechtman, H.

2007 The Inka, and Andean Metallurgical Tradition. In *Variations in the Expression of Inka Power*, edited by R. L. Burger, C. Morris and R. Matos Mendieta, pp. 313-355. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

レヴィ=ストロース、クロード

1970[1962] 『今日のトーテミズム』(仲沢紀雄訳)、みすず書房。

1976[1962] 『野生の思考』(大橋保夫訳)、みすず書房。

Makowski, K.

2002 Los personajes frontales de báculos en la iconografía tiahuanaco y huari: ¿tema o convención? *Boletín de Arqueología PUCP* 5(2001):337-373.

2009 Royal Statues, Staff Gods, and the Religious Ideology of the Prehistoric State of Tiwanaku. In *Tiwanaku: Papers from the 2005 Mayer Center Symposium at the Denver Art Museum*, edited by M. Young-Sánchez, pp. 133-164. The Mayer Center for Pre-Columbian & Spanish Colonial Art at the Denver Art Museum, Denver.

増田義郎

1991 「征服と美術—インカおよびインカに征服された諸文化—」、『古代アンデス美術』(増田義郎・島田泉編)、pp. 125-148、岩波書店。

Menzel, D.

1964 Style and Time in the Middle Horizon. *Ñawpa Pacha* 2:1-105.

1968 New Data on the Huari Empire in Middle Horizon Epoch 2A. *Ñawpa Pacha* 6:47-114.

1977 *The Archaeology of Ancient Peru and the Work of Max Uhle*. P. H. Lowie Museum, University of California, Berkeley.

Morris, C. and A. von Hagen

2011 *The Incas: Lords of the Four Quarters*. Thames & Hudson, London.

Onuki, Y. (editor)

1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Hokusen-sha,

Tokio.

Roe, P. G.

- 2008 How to Build a Raptor: Why the Dumbarton Oaks "Scaled Cayman" Callango Textile Is Really a Jaguaroid Harpy Eagle. In *Chavín: Art, Architecture and Culture*, edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 181-216. Monograph 61. Cotsen Institute of Archaeology, University of California, Los Angeles.

Rowe, J. H.

- 1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In *Handbook of South American Indians*, vol. 2, edited by J. H. Steward, pp. 183-330. Bureau of American Ethnology, Bulletin 143. Smithsonian Institution, Washington, D.C.
- 1967 What Kind of a Settlement Was Inca Cuzco? *Ñawpa Pacha* 5:59-76.

Sarmiento de Gamboa, P.

- 1943[1572] *Historia de los Incas*. Segunda edición, enteramente revisada. Emecé Editores, Buenos Aires.

Shimada, I.

- 1990 Cultural Continuities and Discontinuities on the Northern North Coast, Middle-Late Horizons. In *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, edited by M. E. Moseley and A. Cordy-Collins, pp. 297-392. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- 1991 Pachacamac Archaeology: Retrospect and Prospect. In *Pachacamac: A Reprint of the 1903 Edition by Max Uhle*, pp. XV-LXVI. University Museum Monograph 62. University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Stübel, M. A. and M. Uhle

- 1892 *Die Ruinenstaette von Tiahuanaco im Hochlande des Alten Perú: Eine Kulturgeschichtliche Studie auf grund Selbstaendiger Aufnahmen*. Verlag von Karl W. Hiersemann, Leipzig.

Szemiński, J.

- 1993 Vocabulario y Textos Andinos de Don Felipe Guaman Poma de Ayala. In *Nueva Crónica y Buen Gobierno*, edited by F. Guaman Poma de Ayala, Tomo III, pp. 1-267. Edición y prólogo de Franklin Pease G. Y. Fondo de Cultura Económica, Lima.

Van Buren, M.

- 1996 Rethinking the Vertical Archipelago: Ethnicity, Exchange, and History in the South Central Andes. *American Anthropologist* 98(2):338-351.

渡部森哉

- 2007 「インカ国家における地方支配—ペルー北部高地カハマルカ地方の事例—」、『国立民族学博物館研究報告』 32(1):87-144.
- 2009 「ペルー北部高地、エル・パラシオ遺跡の発掘調査—2008年—」、『古代アメリカ』 12:123-139.
- 2010 『インカ帝国の成立—先スペイン期アンデスの社会動態と構造』、春風社。
- 2011 Continuidad cultural y elementos foráneos, en Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio. *Boletín de Arqueología PUCP* 14(2010): 221-238.

ワイズマン、ボリス、ジュディ・グローブス
1998 『レヴィ=ストロース』(棕田直子訳)、現代書館。

Zuidema, R. T.

1985[1983] The Lion in the City: Royal Symbols of Transition in Cuzco. In *Animal Myths and Metaphors in South America*, edited by G. Urton, pp. 183-250. University of Utah Press, Salt Lake City.

1989 *Reyes y Guerreros: Ensayos de Cultura Andina*. FOMCIENCIAS, Lima.

7. El «grifo» pasa: dominio provincial del Estado Wari en los Andes prehispánicos desde la perspectiva de la iconografía zoomórfica

Shinya WATANABE*

En los Andes prehispánicos se representan animales tanto en la iconografía como en la descripción de crónicas. Se considera que algunos animales se utilizaban para el sistema clasificatorio de sociedad, a pesar de que cada ayllu (comunidad elemental en los Andes) no adora a un animal específico como “totem”.

Se sabe que tres categorías de *collana*, *payan* y *kayaw* forman el sistema de tripartición de Cuzco, capital del Imperio Inca, y a cada *ceque* (línea imaginaria que conecta varias huacas) correspondía una de ellas, además en las crónicas se representan felino, ave, y serpiente como animales especiales para Cuzco, indicándonos que existía paralelismo entre tres animales y *collana/payan/kayaw*. Luego se discute la posibilidad de que existe el sistema de tripartición compuesta de felino, ave y pez en Wari-Tiwanaku igual que en el Imperio Inca

Se presenta cabeza de tres animales de felino, ave y pez tanto en la iconografía de la cultura Wari (600-1000 d.C.) como en la cultura Tiwanaku. En la provincia de Wari como en la costa central y norte del Perú se ha documentado una representación de un animal especial con cabeza de ave, denominado “grifo” por Menzel. Sin embargo, este motivo no es popular en la capital donde el motivo felino formaba una posición central. Nuevo descubrimiento de “grifo” en El Palacio, un centro administrativo Wari en la sierra norte del Perú, indica que dentro de la cerámica policroma del estilo Wari no existen las representaciones de felino, sino las de ave que eran más frecuentes. La existencia de “grifo” en la provincia del estado Wari, una iconografía independiente de la capital, sería clave para entender la transformación o sistema de dominio provincial del estado Wari.

* Profesor Asociado del Departamento de Antropología y Filosofía, Facultad de Humanidades, Universidad Nanzan, Japón